

坐禅との出会い

鈴木格禪

今晚は。ただいま黒丸学部長先生から、大変、行き届いた、有難い御紹介を戴いて恐縮しております。先頃から、退任に際して「何かお話しをするように」ということを承つていただきましたが、私は「お話しすること」が大の苦手

の上に、たいへん怠け者に出来ておりますので、途方にくれながら、いろいろ戸惑っている中に、とうとうその時が来てしまいました。

只今は、「最終講義」という御紹介でございましたが、「講

義」ではございませんで、ここに掲げられている御案内の通り、私と「坐禅との出会い」ということについて、お話しを申しあげたいと存じます。お話しの性格上、私の身の上や、ささやかな人生経験ということに触れざるを得ないようになります。お聞き苦しいことは、十二分に承知いたしておりますが、どうかお宥し下さいますようにお願い申しあげます。



私は、大正十五年の秋に、愛知県の或る半島の付け根の辺りにある、小さな町の外れに生まれました。六人兄弟でありますたが、上の三人は静岡県で、下の三人が愛知県で生まれました。その兄姉たちは、戦死・病歿・爆死という状況で、全部、死に絶えてしまい、いま残っているのは、私、たった一人だけであります。

半島というのは、どこでもそうでありますようが、中央の脊梁部に低い山波がさきの方まで連つており、海に面した狭い平地が、それをとりまくように続いていて、そこを貫く細い道路の両側や片側に、崖にへばりつくように、小さな家がつております。お聞き苦しいことは、十二分に承知いたしておりますが、どうかお宥し下さいますようにお願い申しあげます。

学と安心に、非常に大きな影響を与えたながら、四十一歳の若さでお隠れになつた清沢満之先生の御自坊「西方寺」があります。真宗のお寺は、もともとそういうことを教えるのか、あるいは清沢先生の影響なのか、私は、よく存じませんが、近所に住む門徒衆は、小供のときから、お寺へお経を習いに行きました。

ある日、同じ年頃の男の子が二人いる近くの家に遊びに行つたところ、暫くしてその二人が、丘につづく道を白い息を吐きながら駆け下りてきて、父親の前で袱紗を開くと、中からお経の本を取り出し、張りのある声で「帰命無量寿如来・南無不可思議光」と読みはじめました。『正信偈』です。私はそれを非常に羨ましく思いました。その日の事であつたという印象ですが、兄弟の父親が私の方に向い、着物の裾をまくりあげて「結跏趺坐」「格サ、これ出来るかい」と言いました。利かぬ氣で、かなり乱棒者であつた私は、出来んじや（出来ないでか）と言いながら、手を添えて脚を交互に組んでみせた。「それが、坐禪というものだ」と彼は教えてくれました。これが、私の「坐禪」のし始めといえ、し始めということになります。それゆえ私は「坐禪」を、半農半漁を生業とする中年の、無名の方から教えてもらつたことになります。数え年で九歳の時のことです。

その時、母はすでにおりませんでした。母は、私が小学校

に入る前年、昭和七年十二月の初め、癌で亡くなりました。四十八歳でした。静岡県に「お針」の修行にいたった姉が、私を育てるために帰つて来てくれました。姉は仕立物の請負いをし、近郷の娘さん達に「お針」を教えながら私を育ててくれましたが、私が小学校を卒業した年の秋、三十一歳の若さで世を去つてしまいました。こんどは、長いあいだ不在であった父親が帰つて来て、私と一緒に暮すことになりました。父親は近くにあった煉瓦工場で働く、朝鮮半島から来ていた人達の下請けとして、煉瓦を五丁ずつ、荒縄で束ねるだけの作業に従事しました。それは親子二人が、その日をやつと食い繋いでゆくというだけのことで、学資が捻出できるという状況ではありませんでした。そこで私は、その町で、たつた一軒だけあつた活動小屋の、活動写真上映助手や、そこの小屋主が経営していた新聞販売店の新聞配達等をつとめ、ささやかな手当を頂いて学資等に当て、約一里余の道を歩いて学校へ通いました。学校は乙種の商業学校でした。甲種は五ヶ年の修学課程ですが、乙種は三ヶ年で修了してしまいます。二年生になつた年の晚秋のことでした。その日は活動写真の上映がなかつたので、夕刊を配り終つて家へ帰つてみると、電灯は点いていたけれども、家財道具が何もありません。父親が、私には内緒で勝手に家を売つてしまつたのです。小雨に濡れながら家を探して歩きました。丘の中腹にあ

る二軒長屋の左側の家の前に、筵に覆われた家財道具が積んでありましたので、そこが移転先だと分りました。

二間
ふたま

味わい知らされました。

父と私の新らしい住家でありました。途中、どんな話があつたのか知りませんが、年が明けて私達は、関西に住むある人の家に身を寄せるようになりました。始めて、「特急つばめ号」に乗つて西下し、途中で乗り換えて指定の駅に降り立つたとき、迎えに来ていた女性は、こちらが挨拶するより早く、「ああ、来たか。今日からな、私の命令に絶対服従でつせ。えエなア、判つたなア」と、厳しく言いました。夫婦は子供が無く共稼ぎでした。多少なりとも年をくつて、世間というものが、それなりに分つているような年頃ならば、話はもちろん別でありますが、私にとつてそれは、まことに冷たい生活環境であります。父親は一週間も経たぬうちに、「ちょっと散歩してくる」といつて家を出たきり、再び帰つて来ませんでした。そのころ私は、真心をもつて人に接すれば、人は、少なくとも真心をもつて応答してくれるものであるとばかり、素直に思つておりましたが、実際には、そういうものではないということを、骨の髓まで思い知らされました。一つボタンを掛け違つてしまふと、何をしても駄目なのです。自分の思いこみや判断が、いかに「いい加減」であり「あ当てにはならぬものであるか」ということを、腹の底まで

真夏の暑い、そして、明るい太陽の光が、真っ暗に見える日が、毎日毎日つづきました。「死んでしまおう」という思ひが、自然に湧き上つてきました。家出を二度いたしました。一度目は、郷里で死のうと思い、母と姉の位牌を風呂敷に包み、それだけを持って家を出ました。ありきりのお金で買った切符の駅で降り、それから先は尾張まで、歩いて帰るつもりでした。空腹で行き倒れになりそうになりながら、ある川の辺りを辿つているところを、後からきたトラックの運転手さんに助けられました。その方は、朝鮮半島から來ていた労働者でした。二度目は、運賃も都合し、書き置きも残して、やや計画的に家出をしました。結局は、追手に攔つて死の願望は果せませんでした。

しかし、私における絶望的な状況は変つた訳ではありません。そこで私は、軍隊を志願することを条件に、連れ戻されることになりました。自殺をすれば縁者に迷惑をかけ、世間様への恥になるが、軍隊に入つて死ねば、それは「名誉の戦死」ということになる、と思つたからでした。

昭和十六年十二月八日、この日私は、兵庫県の山中にあります。友人の家で、日米開戦のニュースを聞きました。「帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり」というラヂオ放送が、何度も繰り返えされました。

年が改つて間もなく、小雪がしきりに舞う日、私は姫路の師団で、東京陸軍航空学校の受験をいたしました。航空学校を選んだのは、それが「死」への最短距離だと思ったからです。当時、難関をもって知られた学科試験と、厳重な身体検査に合格して、航空学校に到着したのは、昭和十七年四月、桜の満開のころでした。しかしその日、私は到着後に行われた身体検査で宿痾を発見され、即日帰郷を申し渡されました。もはや帰つてゆくべき所はありません。途方に暮れて、校門の前の松林の中におりますと、一人の将校が通りかかる、私に声をかけてくれました。宵闇が迫つていました。事情を話すと彼は、「今夜は俺の所へ泊れ」といつて、私を伴いました。彼は日暮里にある日蓮宗系の寺院の御長男であり、奇しくも、私が所属する筈だった中隊の区隊長であります。親切な区隊長殿は、手術して病を癒せば、一期遅れて十月に入校することを保証し、病院まで探してくれました。

病院は神田の九段下にありました。そこで手術をしたのですが、案に相違して簡単には治らず、手術を重ねることになりました。一回目の手術代は、家を売ったお金を充当してもらいましたが、二度目からはそれが出来ませんでしたので、病院長にお願いして、書生として雇つていたゞくことになりました。手術代も入院費も支払えないでの、働いて支弁しようとしました。非常事態に備えて夜も巻脚絆をしたまま寝

たり、身を粉にして働きました。一日、院長の母親に呼び出され「よく働いてくれるから」といつて、お金の入った紙包を渡されました。頂戴するわけにはゆかぬといって拒みましたがが、彼女は、「生意氣言うんじやないよ、大人に恥をかかせる氣かい」と言つて、引込んでくれません。やむなくそれを頂戴し、待合室の本の整備や、薬餌代の支払えぬ方達の何人か分を、ひそかに支払つて、よい事をしたような気になつておりました。しかし、事は直ぐ露見し、「余計なことをするじゃないか」と叱られましたが、「今日は午後から暇をやら何でも欲しいものを買っておいで」と言われ、病院を出ました。神田は人も知る古書の町です。新旧の書店が軒を並べております。その店を端から歩きながら私は、自分の心の歪みを直し、暗闇に明りをもたらしてくれるような本はないかと探しました。真剣でした。けれども、私の読書能力や心の身丈に合うような書物には、遂に出合うことができませんでした。歩くに疲れ、魂の飢えと虚しさにさいなまれながら、探す気分も喪つて、病院へ帰ろうとしました。ところが、何気なく通りすぎようとした路外れの、小さな書店が何となく気になつて四、五メートルをとつて返し、裸電球の下に横積みになつて、ある本を手にとつてみました。それは、沢木興道老師の提唱を筆録した本であります。それを立ち読みしたものの、手放せなくなつてどうどう買って帰りました

た。自分の身の丈で読み、かつ理解しうる内容であり、人の真実が躍るような語調で説かれていました。しかもその本の末尾には、坐禅の仕方が記されていました。それを頼りに私は、猛烈に坐禅をするようになりました。

十月入校の日、手術があるという院長のために風呂を沸かし、病院中を掃除し、風呂敷包みひとつを手に、裏口からそつと病院を出ました。挨拶は前の日に済ませておきました。

基本校における一年間の基礎教育が終り、上級校に進んでからも、密かに坐禅を行じつづけました。その間にも、再発した宿痾に悩まされ、手術を重ねました。

戦局は苛烈の度を加え、軍部の呼号にもかかわらず、大戦の帰趨は誰の眼にも明らかな様相を呈するようになります。そんな状況の中で私は、極秘に編成された極めて少数の兵員からなる「特別研究演習部隊」の一員となりました。ここは、いかに速疾に優秀な操縦者を養成するかという問題に加え、近い将来に到来するであろう航空状況をも加味した、実験・実習・実戦部隊でありました。すでに音速より速く飛ぶ航空機の操縦理論と実験・人体に荷負される落下速度の限界・一切の計器を除去した場合における人間感覚の可能性といったようなことについての、テストや実験は経験ずみでしたが、ここでは、更にそれが実践的に研究されました。私はここで、人間の意識や感覚が如何にいい加減であり曖昧であ

り、決して當てにはならぬものであるということを学び、また、実戦の中で人間の「生」と「死」が、人間の意志や願望といった精神の埒を、完全に外れたものであり、人の「思い」や、わが「はからい」の全く通用しない別箇の事実であるとすることも、深刻に思い知らされました。間もなく、自分の上に「命令」という形でもたらされるであろうところの、特攻という「死への発進」を正面に予感しながら、それを受容し、それに向って今日を生きつつある自己の全体と、自己そのものについての思惟と苦悩が、私を苛み苦しめました。「死の足音」は否応なしに、一直線に私に迫ってきます。飛行場に出て大地を叩き、星空を仰いで転々反側いたしました。

「栄光の死」を求めて飛行兵になつたのに、いざその「死」が目捷に迫ると苦しむというのは、矛盾です。これは、「求める」あり方と「与えられる」あり方との意識の根本的相違に起因するものと思われます。

そのときの坐禅は「死の恐怖」との戦いで、「恐怖克服」のための格闘でありました。それは、一方的に自分に与えられた逃れ難い「死の恐怖」からどのように逃れ、それをどのように胡麻かすかという、懸命の努力であり必死の工夫であったように思います。

昭和十七年春、航空学校に到着した日、身体検査の結果、中隊からたつた一人帰郷を命じられたとき、はじめて強烈に

存在としての自分の「個」を感じましたが、命令によって、逃れる術とてない「死」を与えられるという事実もまた、息のつまるような「個」を自覚せしめずにはおきませんでした。

病院の書生であったころの「坐禅」は、幼年からの心の暗闇を、何とか突破しようと跪いた切実な坐禅でしたが、昭和十九年から二十年に及ぶ戦争末期の「坐禅」は、真正面から「私だけ」に向い、急速に迫りつつある死の恐怖を、廻避するための坐禅であったように思います。「死の足音」を聞きながら、その「足音」に耳をふさぐ為の坐禅であったといつてよいかもしれません。それはまた、「生死透脱」を願う必死の坐禅であったということができます。けれども、そんな心の中の思いとは別に、それは畢竟、「逃げの坐禅」であったということができましよう。それにもう一つ、自分の精神と肉体を、出来るだけ清冽に保ったまま、祖国に殉じたいという強烈な願望がありました。坐禅はそこに自分を集約するための唯一の方途でもありました。

○

昭和二十年八月十五日、戦争が終りました。秋、復員しました。復員したといつても、帰つて行く家があつたわけではありません。郷里に近い山里に、以前、近所に住んでいた知人を目標にしての復員でした。たつた一晩、その家の土間に

泊めて貰つた私は、近くの農家の一間を無理に借用し、毎日、仕事を探しに出歩きました。戸外で飯盒炊さんするのは、火の用心が悪いという理由で、下宿を出された私は、泊るあてもなく野宿して歩きました。雑草を食べ、蛙を捕つて栄養補給しましたが、蛙には何度も逃げられて、動物蛋白の補給も仮なりませんでした。

一日、もと通つていた商業学校のある町の職業紹介所で、団らざも知人であつた職員と出合い、その人から、寮のある会社を紹介して貰いました。会社は昭和二十年九月二日、米戦艦ミズリー号上で行われた降伏文書調印式に、日本代表として出席した、元外務大臣重光葵氏の実弟が社長さんで、戦時標準船D型などという鉄鋼船を造っていました。寮は港の波打ち際に幾棟も並んでおり、食事は雑炊だつたり、玉蜀黍の粉と海草を、海水で煮込んだものだつたりしました。会社での本務は、毎日、造船の過程を記録する事務職でしたが、身分は工員で、仕事の都合上、しばしば現場に行つて作業に参加したりしました。

ある日、課長から「学校に行かないか」とすすめられました。心中に大きな空洞を感じていた最中だったので、飛びつくように応諾し、入学の手続きをいたしました。夜間の労働学校でした。授業の始めと終りには、若い女性の数人が教壇の上に並び、インターナショナルの歌を唄います。教場に

熱気が溢れているようでした。第八高等学校の先生たちから、資本論や唯物史観を教わりました。そして、名もなき民衆の中に溶けこみ、その人々と共に、新らしい日本の建設のために、身を捨てて働くことを指導されました。巧みな細胞教育でした。私は「量から質への転化」に領き、唯物論によつて、見事に割り切れ説明される人間の歴史に、新らしい世界を見る思いをいたしました。それは一種の驚きであり、新鮮な発見でありました。けれども、それによって空き腹は充たされません。労働学校の授業のない日、会社の帰りの路上に豊かな緑色の野草を発見、同室であった復員の将校と、匍匐前進してこれを雑嚢に一杯摘みとり、夜、鉄帽を鍋に海水で長時間煮込んだものの、どうしても食べることの出来ないものに遭遇したりしました。雑草は「すぎな」でした。とにかく、餓えていました。栄養失調になりました。搗いてない丸麦の雑炊は、消化されないで、その匂お腹を通り抜けて行ってしまいます。ひどいがだると無力感が全身を覆い、わずかな道の傾斜にも喘ぐような状況になりました。けれども、会社を休むわけには参りません。寮費や食費は確実に徴収されますが、会社を休めば、休んだ分だけ給料を差し引かれます。

会社へ行く路の半ばに、海に通ずる河に架った橋があります。橋にさしかかる僅かな坂道を、喘ぐようにして上った

私は、橋の途中で手すりによつて一息き入れながら、考えこみました。労働学校の先生達は、「これが正しいこと」であり、「本当の人間の生き方だ」と、熱心に教えてくれるが、それだけが、本当に「真実」であり「正しいこと」なのだろうかという疑問でした。

出撃の日、寸暇を割いて病牀にある私を見舞い、「貴様の気持はよく分る。地獄でまた遇おう」と言いながら、固く手を握つて訣別した中隊長や、日暮れの飛行場に擬装した練習機で降り立ち、「これから沖縄よ」と告げたあと、翌朝早く飛びたつて行つた同期生など、「死」を担つた多くの顔が、私の心中に往来し明滅しました。彼等は誤れる「生」を生き、虚偽に死んで行つたのか。決して然うではあるまい。彼等は真実に生き、真心をもつて國に殉じて行つたのだ。少くとも、巧みに生きて得々と自分の思想を説き、歴史観の「正しさ」を主張する人達ではなかつた。その内面の最も深いところに潜む思いは如何ようでもあれ、彼等は黙々として任務に従い、そして死んで行つたのだ。そのように思つたとき、「これこそ本当だ」と思いこもうとした唯物論に、少しばかり影がさしこんでくるような気がしました。手すりに寄せた体を反転し、眼を川面から荒廃した焼け跡に移しました。その荒涼とした風景を眺めながら私は、母や姉のことを思つていました。

母はそのころ、静岡県浜名郡飯田村といつた天龍川沿いの寒村の農家の娘で、若い頃は女工さんだったと聞きました。小学校へも行つていなかつたと思ひます。私の手許には、たつた一枚しか母の写真はありません。母の姉妹と思われる三人の女性が、子供連れで写つています。この写真は、爆死した私の実の姉が、疎開をしていた僅かな遺品の中から発見したもので、台紙に貼られています。母は小肥りで、その眼は細く、とても優しさうです。私は、母が本や文字を読んでいた姿を見たことはありません。きっと、読みなかつたのだろうと思ひます。けれども母は、私にとつて、やはり世界一の母です。厚手の「寝んねこ」で私を背負い、歌つてくれた子守唄を、今でも鮮明に憶えています。シニーベルトの子守唄といつた類のものではありません。それは弘法大師の和讃でした。

帰命頃礼適正尊・宝亀五年の水無月に
玉も寄るてふ讃岐湯――

子供心にも母の子守唄は、少し音程が違うように思ひました。母は音痴だったのかもしれません。母が亡くなつたあと、私を育ててくれた姉が、「母にお経を读んであげなさい」というと、私は小さな仏壇の前に座つて、この和讃を詠みあげました。その和讃は今でも、音程の違つてゐるところは違つたままに、復元することができます。母の子守唄は、母の

背中や胸の温もりや匂いと共に、私の体の中に染みこんでいます。子守唄を歌うとき丸まげを結つた母の細い目は、優しく、暖かく、そして哀しかつたよう思います。

母の死後、七年目に亡くなつた姉もまた、素朴に「仏さま」を信じていました。菩提寺の庭に、大きな石の地蔵様が建てられていますが、あるとき姉は、そのお地蔵様が自分に語りかけてくれた夢をみたと、嬉しそうに話してくれたことがあります。お靈膳の作り方や供え物の位置や作法など、半紙に筆で丁寧に書きしるし、それを何枚も綴つたものを仏壇の抽出しに仕舞つっていました。そのころ、私の育つた里では、人が死ぬとその人の靈魂が、四十九日の間、その家の棟に留つているという言い伝えがありました。心中では「そんなことのあらう筈はない」と強く思ひながら私は、姉に逢いたい一心で屋根にのぼり、腹這いになつて、ゆっくりと、端から端まで棟を往復いたしました。けれども、遂に姉には逢えませんでした。姉との訣別は、母のときよりもっと悲しい思いにかられ、人目を憚らず号泣いたしました。そんな姉への回顧もまた、母の面影と一緒に蘇つてきました。

宗教という文化現象についての知識は、皆無に近いといつてよい状況でしたが、それを根本的に否定する唯物論やその歴史観を、素直に受容すべきか否かに迫られました。二者択一の激しい内的葛藤の果てに、私は唯物史観を捨てようと心

に決めました。それは、栄養失調のけだるい体が、橋の上で行つた必死の選択でした。そして、その選択を促したのは、日本の、夜明け前の空に飛翔して再び還つては来なかつた多くの人たちや、母や姉の、素朴で懐しい肌や心の温もりであり、その匂いでありました。

労働学校をやめた私は、一日、街へ本を求めて出ました。どこの本屋さんへ行つても、書物などはほとんどあります。書棚に立つてゐる書物は、新本と古本とが混つております。その数も知れたものでした。仏教に関する本など、全く見当らぬ状態でした。しかし偶然にも、ある書店の土間に『仏教概論』と標した書物のあるのを見つけ、それを買って帰ると貪るように読みました。その本には「仏教の目的は△転迷開悟・離苦得樂△である」と書いてありました。この言葉は、

その後、長く私の中に沈澱いたしました。「迷を転じて悟りを開き、苦を離れて樂を得る」ということは、おそらく本当のことであらうけれども、それは、仏教の宗教的結果とその様相を、外から眺めただけの言語的表現であつて、これから仏教を学ぼうとする者にとっては、いかにも虚しい言葉のように思われました。ずっと後になつてこの言葉は、慈雲尊者の「断惡証理は劣機の妄想」という語に巡りあうことによつて、私の中から影をひそめて行くことになります。

五月一日は労働者の祭典、メーデーの日です。幾本も並ん

だ真紅の大きな旗を先頭に、かなり長い道のりを、名古屋の市役所まで行進いたしました。戦後最初のメーデーです。どの顔も上気し、興奮していました。組合を代表して、のちに社会党の代議士になった加藤寛十氏が演説しました。働く者の群によつて街並は、しばらく埋めつくされていました。その人達が繰り上げる大きなうねりの中に身を置き人いきれに揉まれながら、私の心は、誇らし気な真紅の旗に背を向けていました。

復員してからこのころまでは、「生きる」ことに精一杯でした。それは飢餓との深刻な戦いでもありました。辛うじて自分を支えていた人間としての「誇り」や「節度」を、ほんの僅かに踏みこえることができれば、「生きること」はどんなにた易く、樂であろうと、しばしば思いました。「一日三合」と、赤字で大書された米の配給量を示す広告に引かれて、炭坑夫になろうと思つたこともあります。逃げる蛙を田圃に追いかけながら、まだ、人間としての「誇り」は捨て得ませんでした。ゴミ箱を漁つて餌を求めるような行為は、人間としての「節度」が許しませんでした。「ほんとうに餓えてはいなかつたのだ」と難じられれば、それまでです。ともすれば崩れそうな、内面的境界線を支え、動物への踏み出しを辛うじて守つてくれたのは「坐禅」でした。右せんか左せんかと悩みながら、結局、左を捨てた苦渋の選択もまた、

「坐禅」によるものでありした。この時の「坐禅」には、何処にも宗教的内容はありません。「いのち」の「のうち」の中で、必死に「生の方向」をまさぐった「泣きながらの坐禅」がありました。

○

会社をやめた私は、心の飢えを充たすべく当てもなく街をさまよいました。行きずりにキリスト教の教会の門をくぐつたり、天理教の家に立ちよつたり、お寺の玄関先で和尚の話を聞いたりしました。しかし、そのいずれもが、（その時は）自分とは遠く隔つた所に吹く風のように、ひどく虚しいもののように思われました。その一方で、胃袋の餓えの方も、容赦なく私をそそのかします。そこで私は、復員のとき支給された二・三枚の毛布と、復員後もかなり被着していた飛行服を叩き売り、それを元手に、闇で綿糸と若干の絹糸を仕入れ、行商して歩くことを始めました。トランク一つを提げて歩く闇の行商人になったのです。その頃、綿は統制品でした。何よりも日常的な必需品ですから、比較的によく売れました。だんだん糸の種類も増やし、綿で作った襦袢なども持つて歩くようになりました。「△商い△は昔から△飽きない△」というくらいのものだから、厭になつても辛棒して、やり続けなくちゃいけないよ」と、励してくれる人もおりました。

しかし「商い」は、元手の上に「儲け」を載せて販売します。それは当然のことだし、分りきつたことですが、私には、それが逆^さも気になりました。何か「悪いこと」をしているように思えてならないのです。「元は十円だから、この上に二円足して、十二円で買って下さい」と、何時でも言って歩けば、多少気持の救いはあつたかもしませんが、それは出来ぬ相談です。五円で仕入れた品物を、十円で売らなければならぬ時など、胸がドキドキし、あとには、やり切れぬ罪悪感が残りました。六畳一間の板の間に乳飲み子を抱え、針仕事で生計を立てている人の所を訪ねた時には、求められた糸「ひとかせ」だけを原価で売り、あと幾かせも進呈して、急いで退出したこともあります。私を育ててくれた姉とイメージが重つて、たまらなく切ない思いがしたからでした。行商しながら、品物を全部、タダであげられたら、どんなにいいだろうと思いました。このとき判りと「自分は商人には向かぬ」と知りました。行商は、愛知・岐阜・三重・長野・静岡の各県にわたり、とりわけ邊鄙なところを選んで歩きました。ある日、中部天竜の山峡の道を歩いていたとき、突きあげてくる罪悪感に堪えられなくなつた私は、品物の詰つた鞄を天竜川に叩きこみ、自分もそこへ飛びこんで、死んでしまおうと橋の欄干に手をかけました。そのとき、私の内側から、これを止めようとする「何か」が辛うじて私を押しとど

め、支えてくれました。切羽詰った気持を抱いたまま、私は近くの寺を訪ね「出家したい旨」を告げました。

昭和二十一年九月末、落下傘袋ひとつを背に私は、その寺の和尚から紹介された静岡県下の山中にある、貧しい禅寺の小僧になりました。その時、私は少しも知りませんでしたが、それより半歳前、つまり、昭和二十一年四月、この寺に、曹洞宗の指定専門僧堂が開設されており、沢木興道老師が堂長として任命されました。それは私にとって、まさに不思議な出来事でした。同年十二月、臘八接心のはじまる前日、私は始めて生きた老師に「相見の拝」をいたしました。一山の雲袖二十余名、外来の方をも含めての、厳しい参禅修行がはじまりました。破れ鐘のような老師の、歯切れのよい大きな声が堂内に響きわたりました。坐禅堂のガラス障子が、響鳴して音をたてるのではないかと思われる程でした。年が明けて二月中旬の「涅槃会接心」の講本は、「大智禪師法語」でした。この「法語」は沢木老師の印施で、内容は、所謂「かな法語」と呼ばれるものと「十二時法語」の二篇から成る、十四・五葉足らずの薄いものでしたが、そこに盛られた法要は、肺腑をつくような真実語に貫れていました。ことに、

「夫れ生死の大事を截断することは、坐禅にすぎたる要径なし。坐禅は、静かなる処に蒲団一枚を安じ、その上に端

身正坐して、身になすことなく、口にいふことなく、意に善惡をはからず、唯しづかに坐して壁に面ひ、坐して日を送る。この外に何の奇特玄妙の道理なし」

という一節は、強く私の魂につきさりました。大智禪師は鎌倉時代末期に生まれ、南北朝時代を通して、一筋に道元禪師の仏法を鼓吹した祖席の雄将です。肥後の国宇土郡に出生し、二十六歳から三十六歳までの足かけ十一年を、中国各地に学んで禪の秘奥を探り、帰國の後は九州の豪族菊池一族を教導して、その節を曲げなかつた純禪の人でした。六十年にわたる南北両朝の拮抗に、常にかかわり続けた菊池一族は、時には当主以下全滅の戦があつたり、本城を奪われたりするなどして、常に勝利の栄誉を担つていて訳ではありません。いつの世にも「戦い」は凄惨なものです。その惨らしさは男だけとは限りません。女性にも子供にも老人にも等しく襲いかかってきます。「戦い」には、常に血の匂いがつき纏い、その蔭には、幾百千の魂の悲歎と慟哭がついて廻ります。そういう事実の真只中にあって大智禪師は、坐禅をしても「奇特玄妙の道理」は、何ひとつないと説いたのです。

戦塵の日にも飢餓の日にも、そして、魂の救いを求めて市井をさすらった日にも、私の心を占領し、私の魂の中に居座っていたのは、どこまでも自己中心的な「甘え」であり、主我的な「観念の逃避」にしかすぎませんでした。米戦闘機のグ

ラマンやカーチスP51などに狙い撃ちされたあと、「俺の顔色は変っているか」と聞き、「少し青くあります」と応答され、へこんなことでは未だ坐禅が足りぬなどと反省したりしましたが、それは、「坐禅」の正当な学びの在り方ではなくし、「的」を外れた独断的で「独りよがりの坐禅」、「つくり物の坐禅」以外の何者でもなく、その上、知らぬ間に「気どり」の混っていたことに、ようやく気づかされました。

老師は年に一度か二度、接心のときにして下さるだけです。貧乏寺の毎日は、僧堂の基本的な行事の外は、早朝から暗くなるまで、作務(労働)の連続であり、それに毎月二日間の托鉢と、年に何回かの遠出の托鉢が重なります。気質も経歴も素養もまるで異なる若い者達の共同生活体は、それなりに様々な問題を内側に包んでいます。集団生活はその全体が、常に負の方向への強い傾斜の中にあります。これを復元しつづけてゆくためには、内にも外にも競いおこる葛藤に、不斷に対応してゆかねばなりません。僧や、僧侶の世界のことを全く知らず、その一員として僧堂の生活を送りはじめてから間もなく、剃髪得度し法衣を身に纏つた感銘が、急激に衰え萎えてゆくのを感じました。

やがて、餓えや重労働や猛訓練に堪え、寝る間も惜しみ、寸暇を探して坐禅してきた筈なのに、必ずしもそうではなくなっている自分に気がつきました。そして、その自分が、ま

たしきりに自らを責めたてるのでした。在家人であったときは、それなりに純粹であり真剣であり懸命でありました。それが、柔門に入つて「坐禅」が日常化してくると、「坐禅」への意識とイメージが変ってきたのです。これは一体どういうことなのでしょう。もちろん、僧には、僧として身につければならぬ基本的な規矩や坐作進退があり、叢林(修行道場)には叢林に特有の情規(修行の定め)や家風があります。ただ、「坐禅」さえすればよいというのでありません。坐禅をする時刻も時間も仕方も場所も服装も、厳格に定められています。それだから、宗教的情熱が燃えさかり、内なる要求が高まって己れを促したとき、時間や場所、ないし服装等を押ばず坐禅するというのとは、自らその意識のあり方が異つて参ります。坐禅をしたい時にも坐禅はできず、また、してはならないし、坐禅をしたくない時でも、坐禅をしなければなりません。「大衆もし坐すれば衆に随つて坐し、大衆もし臥せば、衆に随つて臥す」、それが「仏祖の皮肉骨髓であり、自己の身心脱落である」(『弁道法』)と、道元禪師は説かれています。「坐禅」は、自分の都合や内面的 requirement の有無によって、行ずることではありませんでした。自分の都合の良し悪しや、自分の氣に入るか否かを標準にするのは、どこまでも「自己中心的」「主我的」な営みという外ではなく、それは「自我道」「凡夫道」にはなっても「仏道」にはならぬ道理でした。

小僧になり僧堂に入つても、僧としての初步的な躰も作法も知らず、叢林の撻にも全く無知であつた私は、古参雲水達の特別訓練の格好の標的となりました。しかし、そんなことは集団生活につきものの一種の通過儀礼にすぎず、「もつと大事なもの」があると、至心に思つていきました。けれども、あるべき筈の「もつと大事なもの」に遭遇しないのに、「時」は容赦なく過ぎてゆきます。叢林(集団生活)に特有な通過儀礼や、理不尽な桎梏の中で、かつて造船会社の工員であつたときに読んだ『仏教概論』に、仏教の目的を「離苦」と説いてあつたが、「苦からの脱出」もまた「苦」ではないか、と思つたりしました。

寺の小僧になつて、いっぱい「坐禅」ができるとばかり思つていたのに、大事なことは、「坐禅」より「作務」であつたり、自分の要求に基く「坐禅」が、「坐禅」の本筋ではないという事實を学んだことは、私における「坐禅」受容の大大きな転機であつたということができるよう思います。

○

昭和二十三年四月、私は駒沢大学専門部仏教科(署称「専仏」)に入學を許可されました。校舎にはまだ迷彩が残つておらず、学園には軍服姿が溢れていました。「坐禅」は、「禪学実習」と呼ばれて必修科目であり、担当は沢木老師でした。毎

週火曜日には、夕景六時より「火曜参禅会」が開かれ、学外からも、志ある方々がこれに参加いたしました。

どこからも仕送りのない私は、入学頭初からアルバイトをしなければなりませんでしたが、そんな状況の学生は珍らしいことではなく、多くの者がアルバイトをしていました。食糧事情は悪く、学生達は、心も体も餓えていました。まだ米軍の空襲による焼け跡が、到る所に遺つており、国の全体が、なお餓えと昏迷のさ中についたといつてよい時代でありました。一月には帝銀事件があり、十二月には極東軍事裁判によるA級戦犯の、東條英機元首相外七名の、絞首刑が執行されました。

ニュース映画で、一世の英雄とうたわれたイタリヤのムッソリーニが捕えられ、木製の檻に入れられて運ばれる様子や、処刑されたあと愛人と共に逆さに吊り下げられ、乱暴に扱われた上、群衆に足蹴にされる状況を見たり、ナチの戦犯が、大群衆の見守る中で公開処刑される情景を見たりして、人間の「生」と「死」について、また改めて考えさせられました。幼い時から、肉親の死はもとより、鉄道自殺の死体、崖崩れによる死、祭礼の山車による轡死体をはじめ、戦火による死体その他を、数えきれぬほど沢山みて来ましたが、それとはまた違った感慨が、外国のニュース映画にはありました。坐禅をする私の中を、それらと一丸となつた「死」の問題

が、依然として大きく影を落しておりました。

専仏を卒業し、改めて学部仏教科に入学しましたが、昭和二十八年三月に卒業、四月一日から、竹友寮の寮監として本学のお世話になることになりました。「禅学実習」という称呼に、はじめ、違和感と抵抗を感じて、なかなか馴染めませんでしたが、その感覚も次第に鈍磨し、「坐禅」も、以前とは違った意味で日常化して参りました。約十九年勤めさせていたゞいた寮監職は、ある日、突如免ぜられてしまいました。何の予告も前振れもなく、何ひとつ理由も示されませんでした。大吐血をしました。血を吐く思いというのは、実際にあります。

昭和五十四年の夏の末「東西靈性の交流」の一員に指名され、本日ここに、遠く滋賀県から御出で下っている花園大学の、西村恵信先生や、本学の皆川広義先生はじめ、多くの方々と一緒に渡欧いたしました。私の配属になったのは、西独のミュンヘン近郊に所在するカトリック・ベネデクト会に所属する「聖オッテリエン大修道院」でありました。予定された研修や学習が三分の一ほど進んだ某日、大修道のドクターの前で私は、酸化して真っ黒になつた血を大量に吐き、即刻、少し離れた町の病院に運ばれました。入院するとき、本山版の『正法眼藏』を一冊だけ持つて行きました。私は言葉ができません。個室の病床にあって私は、改めて「死」につ

いて考えました。自己の「死」への内面的対応のあり方は、昭和二十年初夏のころ、すでに完了し決定していました。新らしい部隊への転進を、そのことを以って、上官への餞別としたことがあります。「死」は私の中に、とつぐに解決済みのことであった筈であります。ところが、異国の孤独な病床で私は、往年の「死の決定」が完全に色褪せ錆ついていることに気づかされました。戦時中と平時という状況のちがい、独り身であった時と、妻子眷族を抱えた生活責任者としてある者との、意識や感覚の違い、言語や文化が連続する地域に、「群れ」として生きる場合と、それらとは全く異った文化圏に、幾万里も相距つて孤立してある場合という如き、与件の根本的な相違等が、そのときまで、私の内に、なお新鮮に生きつづけていたとばかり、勝手に思いこんでいた私における「死の決定」の意識と想念を、見事に打ち砕いてくれました。異国での入院は、私に、かつての「死の決定」が、完全に「観念の死灰」に成り果てたことを、直かにつきつけてくれたのです。自らの生涯をかけたところの、文字通り「必死の選択と決定」であったことすら、断えず、真新しく保ちつづけていなければ、気づかぬうちに、その意味も価値も生命も、急速に失つてしまふものだということを、否応なしに学ばされました。「生の保存」が出来ないよう、「坐禅の保存」も「貯え」も、また、決してできません。

もうひとつ、わが宗では坐禅の姿勢について、いとも厳しく教育指導いたします。しかし、身体上の欠損やそれを果し得ない身体状況にある方は、どのようにしたらよいかという問題が残ります。坐禅は、健常者のみに説かれた道であるのか、それとも、現実に坐禅を行じ得ない身体状況にある方も妥当する法であるのか、もし後者を除くというのであれば「普勸坐禪儀」とは言えぬ道理であり、一切衆生を救済するという仏法の誓願にも、宗教の本旨にも叶わぬことになってしまいます。これをどのように理解し受容すべきかということについても私は、随分長いあいだ苦しみ抜いて参りました。そのことについて、私なりに解決の道を見出しましたが、それは、また別の機会にゆずりたいと思います。

一般的な宗教学の概念ないし言葉を借用して表現すれば、私は、「現実は神の事実の世界である」と思っています。「わが生」は「神の事実」としてある。ここで私が「神」というのは「ハタラキ」のことです。「神のハタラキ」ということではなくて、「ハタラキ」をかりに「神」と表現したのです。ここでいう「神」は、また「われなき事実」ということが出来ます。人は母胎に着床托胎したその瞬間から、「神」に背くものとしてしか生きてゆくことができません。わが生は、本来的に「神に背く」という構造においてあるのです。「神」に背いてしか生きられぬ造悪の凡夫としての「われ」が、「ま

こと」に生きることは、どういことなのでしょうか。私は、人間という存在そのものは「まこと」であっても、その「思い」に「まこと」はないと考えています。「まこと」もなければ「正義」もないと考えています。それゆえ、人間の主張する「まこと」や「正義」は、必ず争いのもとになり戦争の原因になります。「神」をかついた人間が「神」の名において、自分に都合のよい「正義」を主張しあうこところに、戦う名で呼ばれる人間の殺しあいが起るのです。争いは「わが正義」の主張においてあります。私は「まこと」を「マコト」と書き「真事」と漢字で表記することにしていました。「真事」の「真」は「眞実」の「眞」です。「事」は具体的な「コト」つまり、存在・現象・事象・事実です。欲望的・存在としての「われ」は、もともと「真事」としてあらしめられています。その「われ」は、しかしながら「まこと」に背くものとしてしか生きてゆくことができません。「われなき事実」としての存在である私は、「われある」ものとしてしか生きることはできません。これは絶対の矛盾です。この根源的絶対の矛盾を解決したのが、道元禅師の「只管打坐」です。

私は道元禅師の仏法を「煩惱の一つ一つを具さに備えた、物欲しい存在としての自分の身心を素材として、「マコト」を行為的に証明しつづけてゆくことである」と理解しています。

す。そして、そのように「われ」を慾懃せしめるのは、「マコトの縁による促し」であると理解しています。「求道の志」や「菩提心」は、「縁」によって起るものに違いありません。これをまた「神の促し」といつてよいかも知れません。

沢木老師は常々、「坐禅をしても何にもならん」と仰せになりました。「坐禅」が自分の足し前になつたら、凡夫としての「われ」が肥えてゆくことになります。「何にもならぬ」とは「われの潰え」です。「われ」が潰えて、はじめて「ほとけ」の誕生です。「仏道」は「仏の道」の謂であつて、「凡夫の道」や「吾我の道」の称ではない道理です。

○

昭和十七年から沢木老師によつて、道元禪師の坐禅を教えていたときました。死ぬことばかりを考えていた一個の貧書生が、「坐禅」に礙えられ「坐禅」に導かれて、五十余年も過させていただいたことは、まことに不思議な縁であったといふ外はございません。耻をしのんでお話し申上げましたように、その「坐禅」も、決して単調ではありませんでした。苦惱からの脱出を必死に願つた「逃げの坐禅」があつたり、身心を清らかに保持することを求め、「死」を超克しようと、懸命に工夫した「絶望の坐禅」があつたり、辛うじて人間の節度を支えた「餓えの坐禅」があつたり、その時、その状況

に応じて、頭の中では、よく諒解している筈の「只管打坐」も、さまざまな彩りをみせて、私を支え導いてくれました。しかしながらそれは、「坐禅」と「私」が遠くに待峙して、まだ他人の関係にあつたからだということが出来ましよう。僧侶になつて「坐禅」に抵抗や失望を感じたり、うとましく思つたりしたことがなかつた訳ではありませんが、それは却つて、私が「坐禅」と他人行儀ではなくなつたということなのだと思います。

「坐禅」に引つ張られ、「坐禅」に追いまわされていた私が、いつの間にか「坐禅」の時間に遅れたり、何等かの事由で、定められた時間における「坐禅」が出来なかつた場合等には、いたたまれないような「耻しさ」と「申訳なさ」を感じ、ひどく罪悪感を覚えるようになりました。それも今は次第に薄れていくように感じることがあります。昭和二十年代の中頃、叢林に長くいたという学生の坐禅が、いかにも「心得え顔の坐禅」「馴(狎)れた坐禅」であるのを見て、ひどく「おぞましさ」と嫌悪感を抱いたことがあります。坐禅に「馴れ」や「狎れ」があつてはなりません。いつも初心者のよう、新鮮でなければなりません。ここ三十年程前から私は、何となく坐禅に積極的になりました。「逃げ」の要素が消えたのです。坐禅の時間が到来する以前に、おのずから体が動いて、出来るだけ早く、人様より先に坐堂に入るよう

なりました。無理をしているのでも、気張っているのでもありません。自然にそのようになるのです。しかし、「坐禅」に親しむようになってからも、「私」と「坐禅」は、まだ、相対する関係にあつたように思います。「坐禅」と「私」が対面しているのです。それが、肩を並べるようになりました。

今はその感じも消え果てて、何ともなくなりました。これは「私」の「呆け」なのでしょうか、それとも、ようやく坐禅に「出逢えた」ということなのでしょうか。よく分りません。生の事実とその道理の上からいえば、人の生に「残り時間」はありません。しかし、生活経験の「感じ」の上から言え、停年になつて「残り時間」は、ほんの少しになつてしましました。

その僅かな「残り時間」の中をやはり、少しでも「坐禅」に近づき、相當むことを、よろこび、のぞみ、こころざし、ねがう者として、時には「坐禅」に睨まれ、叱られながら、生きてゆきたいと思っています。たつたいま、「坐禅」と他人行儀でなくなり、「坐禅」と対面していないと申しあげたばかりの私が、「坐禅」に近づくことを、「よろこび」「のぞみ」「こころざし」「ねがうもの」としてあり、「坐禅」に「睨まれ」「叱られ」ながら生きてゆく等と言いますと、前后矛盾するように思われるかもしれません、私にとって「坐禅」は、やはり、「私」を超絶した「ハタラキ」でありま

す。その意味で、「私」と「坐禅」との歴史は、永遠であり、埋めようがありません。私にとって「坐禅」は、欲望的存としての「われ」が、「神に潰える」幽遠なる道であります。それをまた、「神への全き委ね」といつてもよろしいであります。換言すれば、「坐禅」は、「△マコト△」の実践的証し」であります。愚かで不器用な私が、辛うじて果しての、うるたつた一つの△マコト△の証明は、「坐禅」することによってのみ、契えさせてもらうことができると思っております。それゆえ、「坐禅」に親しいなどと言って、「呆け」てはおられないのです。「坐禅」はやはり、少しも油断のできぬところの、遠い、嶮しい道であるように思います。

以上、元来ならば、秘しておくべき私の貧しい経験の、ほんの一部を御紹介しながら、私と「坐禅との出会い」ということについて、お話し申しあげました。矢張り「呆け茄子格禪」であり、「耻をかく禪」であります。終ります。有難うございました。



皆さん、長いあいだ本当にお世話になりました。この、どうしようもなかつた私を、育てて頂いた皆様方や大学に、心から、御礼を申し上げます。まことに有難うございました。